

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

大学1年生を対象としたキャリア教育の実践研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): carrer education, vocational choices, occupational anxiety, 1st year university students, practical study 作成者: 藤枝, 静暁, 斉藤, 光映, 新井, 邦二郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/341

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



大学1年生を対象としたキャリア教育の実践研究

A Practical Study of Career Education for 1st Year University Students

藤枝 静暁¹・斉藤 光映²・新井邦二郎³

FUJIEDA Shizuaki, SAITOU Mitsuaki and ARAI Kunijirou

1. 問題と目的

第一筆者はこれまで10年間以上にわたって、保育者および小学校教員の養成に携わってきた。そこで出会った学生の大半は、「保育士資格および教員免許状を取得し、将来、保育者または教師になりたい」という目標を持っていた。実際、彼らは最高学年になると、その目標に向かって就職活動に取り組んでいた。

第一筆者は2013年度まで上記の職に従事し、2014年度より現職に異動した。現在所属している学科は言語・コミュニケーション領域、史学・文化領域、心理学領域の3つをバランスよく学ぶことを目的としている。中学校の国語、英語、社会および高等学校の国語、英語、地理歴史の教員免許状の取得が可能であるものの、教育職員免許課程に登録する学生数は多くない。

第一筆者は大学1年生を対象とした教養演習という通年の授業を担当している。この授業は固定クラス制であり、一クラスあたりの人数は10人から12人程度である。授業内容は各授業者の狙いに沿って構成することができる。2015年度前期においては、受講生の自己理解、思考力および発表力の育成を目的とした言語活動を行った。具体的には、受講生は与えられたテーマについて3分間で自分の意見や考えをまとめ、その後3分間で発表した。他の受講生はその発表を聞き、質問、意見、感想を述べた。テーマの例は、中学・高校時代の部活紹介、これまで出会った恩師につい

て、大学と高校の学習および生活の違い、将来の夢、現在受講している授業の中から仲間にお勧めの授業を紹介するなどであった。

受講生が将来の夢について発表した際、「未だ決まっていない」「分からない」「これから自分に向いている仕事を探すつもり」という内容が多かった。第一筆者はこの発表を聞き、かつて担当していた学生と現在担当している受講生では、将来の夢に明らかな違いがあると感じた。前者は将来の夢が明確であったのに対して、後者は明確になっていないのである。

後日、第一筆者が第二筆者（第一筆者が所属している大学のキャリア支援課のキャリアカウンセラー）に2015年度における卒業生の就職先を尋ねたところ、Figure 1のように多岐にわたることが分かった。このように就職した学生がいる一方で、大学4年生になっても就職活動に取り組まなかったり、職種選択で迷い続けたり、就職活動の開始が遅かったといった理由で卒業時点で就職が未決定の学生がいることも分かった。第二筆者によると、こうした事態を避けるためには、大学1年生の時点から、将来の就職を意識して学生生活を送ることが望ましいとのことであった。

辻（2006）は大学1年生を対象に進路希望や職業観に関する調査を行った。その結果から、大学1年生のキャリア成熟度は高校卒業時のものと大きく変わらないこと、ほとんどの大学1年生が社会に出ることに対して不安を抱いていることが明らかになった。だからこそ、1年次および2年次におけるキャリア教育は、大学教育において非常に重要な位置づけにある、と辻（2006）は指摘している。

1 埼玉学園大学大学院心理学研究科准教授

2 埼玉学園大学キャリア支援課主任・キャリアカウンセラー

3 筑波大学名誉教授、東京成徳大学大学院心理学研究科教授

また、辻 (2007) は大学1年生を対象に、自分に合った仕事を自立的に見つける能力・態度を測定する調査を行った結果、望ましくないキャリアの思考が浮き彫りになった。それは、職業に関する知識がないこと、やりたいと思っている仕事为本当に自分のやりたい仕事なのか自信が持てないということ、将来考えている自分と現在の自分との間のギャップに不安を感じていること、自分のなりたい職業に必ず就かなければならないと思っていることの4点であった。くわえて、多くの大学1年生が、キャリアに関してネガティブかつ受け身に考えていることも明らかになった。こうした結果を踏まえて、辻 (2007) は大学側がやるべきことを2つ提案している。一つは、学生からの様々な悩みを受け入れられるような相談窓口を強化・充実させることである。もう一つは、学生の自主性や積極性を促すことを目的として、課外活動やボランティア活動に対する支援業務を充実させることである。

児美川 (2015) はキャリア教育の本来の目的は、学校と社会をつなぐことにあると述べている。また、学校教育の内容と方法を、子どもと若者がいずれば社会に漕ぎ出していくことを意識して再構成すること、彼らが「社会で生きていく力」を育て、将来設計の第一歩を手助けすること、これが学校と社会をつなぐことの要諦である、と述べている。鈴木 (2008) は、キャリア教育の目的は「生きる力」をつけること、その「生きる力」とは逆境や困難な事態にあっても、それを乗り越え、前に進んでいける「挫折回復力」と言い換えることができる、と述べている。つまり、大学生のキャリア教育は、単なる就職探しにとどまらず、人生を切り開いていけるような力を養成することが目的と言える。そのためには、学生の主体性に任せることも大切であるが、教師が働きかけることも必要と考えられる。

こうした先行研究より、大学におけるキャリア教育は大学1年次から始めることが望ましく、教師が学生に対して意図的に働きかけていくことが必要と言える。第一筆者が担当している受講生の様子を鑑みても、この必要性は高いと言える。

本研究の目的は、2015年度後期の教養演習の時間にキャリア教育を実施し、受講生の変容を検証することである。キャリア教育は辻 (2007) の

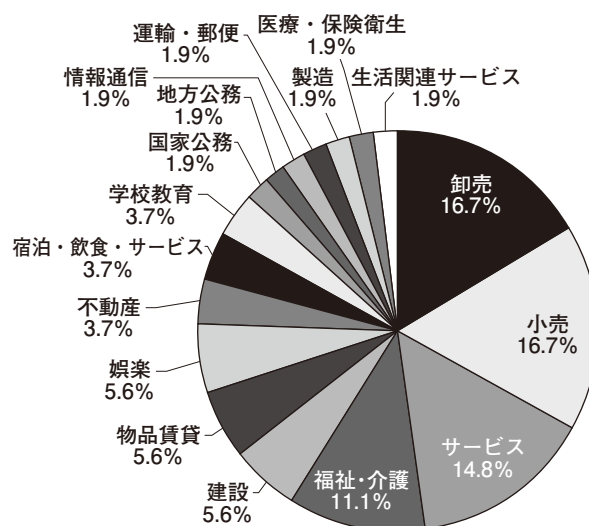


Figure 1 2015年3月卒業生における就職先の業種別分類

2つの提案にならって実施する。なお、キャリア教育を実施するにあたっては、コンピュータやカウンセラー不在の介入よりも、カウンセラーとともに行う介入の方が建設的な変化が示された (小野・安藤, 2011) という指摘を参考にする。具体的には、第一筆者と第二筆者が連携してキャリア教育を行う。第二筆者は国家検定2級キャリアコンサルティング技能士資格、およびCDA (Career Development Adviser 日本キャリア開発協会認定資格) を有している。

2. 方 法

(1) 対象者

平成27年度教養演習の第一筆者が担当するクラスの1年生10名 (男性6名, 女性4名) であった。

(2) 期 間

平成27年度の11月上旬から12月上旬であった。

(3) キャリア教育の内容

キャリア教育は全部で5回行った。辻 (2007) の提案に沿って以下の2種類を取り入れた。

① キャリアカウンセラーによる講話

これは、辻 (2007) の第1の提案 (学生からの様々な悩みを受け入れられるような相談窓口を強化・充実させること) に沿った取り組みである。この提案を実現するためには、まず、受講生に大学内の就職活動において役立つ資源の存在を周知する必要がある。受講生が就職活動を進めていく

上での社会的資源はキャリアセンターとそのスタッフである。そこで、第二筆者が講話をすることによって、受講生はその存在を知ることができると考えた。筆者らが相談し、講話を2回実施す

ることとした。

当日は、第一筆者が司会を行い、第二筆者が講話を行った。第1回の講話の内容を Table 1 に、第2回の講話の内容を Table 2 に示す。

Table 1 第1回講話の内容

話題1：斎藤の略歴について

営業職、システムエンジニア、人事採用担当を経て現職

- ・仕事やキャリアは流動的で、当初想定していなかった仕事をしている。
- ・知らなかった仕事、やりたくなかった仕事に取り組むことで、自分の新たな面に気付いたり、新たなやりがいを得ることができた。
- ・他の事例紹介（芸能事務所タイタン社長 太田光代さん）

話題2：就職活動の準備について

コミュニケーションの経験を積もう

- ・企業や社会では「人と接する」ことを前提に仕事が行われる（人と接しない仕事は機械に代替されてしまう）。また学校と違って、幅広い年齢層の間でコミュニケーションが発生する。
- ・「居心地のよい場所」から出よう
- ・企業や社会では「お客さん」「組織」が「自分」より優先される。自分にとって必ずしも都合や居心地が良いわけではない状況での振舞いが求められる。



- ・アルバイト・ボランティアなどの経験を積むことによって、コミュニケーション力や社会的な振舞い・耐性を身につけておくことができる。

Table 2 第2回講話の内容

話題1：個人のキャリア・人生のうち、「偶然の出来事」（予期しない偶発的なこと）の影響はどれくらいあるのか？

- ・『計画された偶発性理論（ブランド・ハプンスタンス・セオリー）』
- ・ジョン・D・クルンボルツ（スタンフォード大学教育学・心理学教授）
- ・個人のキャリアの8割は予想しない偶発的なことによって決定される。
- ・その予期しない出来事をただ待つだけでなく、自ら創り出せるように積極的に行動したり、周囲の出来事に神経を研ぎ澄ませたりして、偶然を意図的・計画的にステップアップの機会へと変えていくべきである。
- ・とにかく行動してみれば、思わぬ幸い（チャンス）に出会うことがある（犬も歩けば棒に当たる）。

話題2：基本的なスタンス：「オープンマインド」

- ・「私にはこれしかない」「これ以外はやりたくない」という硬直的・閉鎖的な考え方ではなく、何事も前向きに受け止めるということ。
- ・自分が何をしたいかの意思決定にこだわり、一つの仕事や職業を選びとることは、とりもなおさず、それ以外の可能性を捨ててしまうことにつながる。
- ・自分のキャリアの方向性を焦って決めなくていい。無理に目標を持たなくていい。
- ・いろいろなことに首をつっ込み、自分が持っている無限の可能性を信じ、あれこれやってみる。
- ・多くの人の場合、実践を通じて、自分のやりたいこと、進むべき方向性が少しずつ見えてくる。

話題3：実践すべき重要な5つのキーワード

- ・「好奇心」— たえず新しい学習の機会を模索し続けること。自分の興味だけに閉じこもらず、知らない分野に視野を拡げ、さまざまなことに関心をもとう！
- ・「持続性」— 失敗に屈せず、努力し続けること。どんなことでも、何らかの手応えを感じたり、向き不向きを判断できるようになるまでは、めげずに続けてみよう。
- ・「楽観性」— 新しい機会は必ず実現する、可能になるとポジティブに考えること。意に沿わぬ状況や出来事を、ネガティブな出来事として悲観的に受け止めるのではなく、自分の知らない世界に飛び込み成長できるチャンスだと楽観的にとらえよう。「人間万事塞翁が馬」！
- ・「柔軟性」— こだわりを捨て、信念、概念、態度、行動を変えること。「私にはこれしかない」「これ以外はやりたくない」という硬直的・閉鎖的な考え方ではなく、何事もオープンマインドで受け止めてみよう。
- ・「冒険心」— 結果が不確実でも、リスクを取って行動を起こすこと。未知の世界への冒険のようなもの。何が起こるか分らない。痛い目、つらい目に遭うこともあるかもしれない。それでも積極的に行動していこう。その先にあなたの新たな成長が待っている！

② オープンキャンパス・スタッフの説明会を1回開催

これは、辻 (2007) の第2の提案 (学生の自主性や積極性を促すことを目的として、課外活動やボランティア活動に対する支援業務を充実させる) に沿った取り組みである。第一筆者は受講生に「ボランティアをやってみたら」と単に勧めるよりは、身近で参加しやすいボランティアの存在を教えた上で「やってみたら」と勧める方が効果があるのではないかと考えた。

オープンキャンパス・スタッフとは、オープンキャンパスの場で、ボランティアとして活動する学生スタッフのことである。当日は、オープンキャンパスの参加者を誘導したり、学内設備を紹介したり、自らの学生生活を話したりする役割を担っている。

当日は、第一筆者が司会を務め、大学の入試広報課の常勤職員が説明を行った。説明は Figure 2 のポスターの内容に沿って行われた。説明終了後、オープンキャンパス・スタッフの希望者は後日、入試広報課に申し出るよう伝えた。

なお、キャリア教育として行った順番は、キャリアカウンセラーによる第1回目の講話、受講生

の意見・感想発表、オープンキャンパス・スタッフの説明会、キャリアカウンセラーによる第2回目の講話、受講生のワークシートへの記入と意見・感想発表であった。

(4) キャリア教育に対する受講生の感想の収集

① キャリアカウンセラーによる2回の講話に対する感想の収集

第1回の講話を聞いた翌週に、受講生の意見・感想を3分間で発表する場を設けた。

第2回の講話を聞いた翌週に、受講生に「キャリアカウンセラーの第2回講話を聞いた感想・気づき」というワークシートに記入させ、一人ずつ3分間で発表させた。

ワークシートの内容は以下の項目であった。

問1では「就職のことを相談できる窓口であるキャリア課の存在を知っていましたか?」と尋ね、「1: 知っていた」「2: 今回をきっかけに知った」の2択から選択させた。

問2では「キャリアカウンセラーの存在を知っていましたか?」と尋ね、「1: 知っていた」「2: 今回をきっかけに知った」の2択から選択させた。

問3は「キャリアカウンセラーの話を聞いて、課外活動やボランティアを新たに始めてみようと考えようになりましたか?」を質問した。回答は「1: ならなかった」「2: あまりならなかった」「3: まあまあなった」「4: なった」の4つから回答させた。

問4では「キャリアカウンセラーの話を聞いた後、実際に何か始めたことがあったら教えて下さい」と尋ね、自由記述法により回答させた。

問5は「キャリア教育に参加した感想、自己理解、学生生活について気づいたことなどを書いて下さい」と教示し、自由記述法にて回答させた。

(5) 受講生に対する倫理的配慮

第一筆者が受講生にワークシートに回答させるにあたり、個人情報保護されること、授業成績には影響を与えないことを伝えた。回答を拒否した者、また、途中で棄権した者はいなかった。

3. 結 果

第1回の講話では10名中9名が出席した。第1回の講話に対する発表を行った授業は全員が出



Figure 2 オープンキャンパス説明会資料

席した。受講生の意見・感想を Table 3 に示した。

第2回の講話への出席は10名中7名であった。第2回の講話に対する発表を行った授業は10名中6名が出席した。Table 4 に受講生のワークシートへの回答を示した。なお、Table 3 と Table 4

の番号は同一人物である。

4. 考 察

本研究の目的は、教養演習を受講している大学1年生10名を対象にキャリア教育を実施し、そ

Table 3 第1回講話に対する学生の意見・感想

番号	性別	発表内容
1	男	人間文化学科を出て、どこに行けるのか知りたい。どこに就職できるのか？真剣に打ち込めることも無いし、先が不安。バイト先で大学中退して、威張っている先輩がいる。その人を見て、「あのようにはなりたくない」と強く思う。バイト人生は嫌。大学院も考えている。
2	男	高校の時には、卒業後、就職を考えていた。大学はお金がかかるし、行くつもりは無かった。試しに、地元の役所を受験した。受験生のほとんどが大学生であった。面接の質問にもまったく答えられなかった。この時に、高卒では歯が立たないと思った。高校の先生の勧めもあって、大学進学にした。今は、就職についてはっきりしていないので、じっくりと考えたい。
3	男	話を聞いて、一生、バイトは厳しいと思った。高校の先生の勧めで、国語の教師を目指している。とりあえず、教員免許をとろうと思って、教職課程に登録した。
4	男	自分に合っている分野を探せるか不安はある。カウンセラーさんが中学高校時代に部活ばかりやっていたが、就職できたという話を聞いて安心した。市役所の職員とか公務員にならなれそうな気がする。バイトだけでやっていくのは、厳しいことが分かった。
5	女	小さいときから、ずっと父親の言うことを聞いて来た。父からはずっと、公務員か教師になれと言われてきたが、自分は堅苦しいのが嫌だから嫌だ。入学当初、教職課程に登録したが、そのガイダンスで「中途半端な気持ちの人はやめた方がよい」と言われ、やめた。就職は、自分の意思で決めたい。自分で決めるのはドキドキするけど、自分の道を歩みたい。今、興味があるのは、医療事務の仕事。この資格を取りたい。
6	男	話を聞いて、自分に合わない仕事でもやってみようという気になった。一つの職場よりもいろいろな職場を経験したい。先日、職業適正検査を受けた。きちんと仕事を教えてくれる先輩がいる職場がよい。
7	女	高校時代は保育士になりたかった。しかし、手先の器用さが必要なのと、ピアノができなかったので、あきらめた。心理にはもともと興味があった。心理学とそれ以外の歴史・文学なども学べるので、本学を選んだ。話を聞いて、途中で転職もできることを知り、それもアリだなと思った。カウンセラーの先生が言っていたように、就職の方向を早めに決めたい。母親が老人施設で管理栄養士をしている。資格を持っていると、就職に有利だと思う。母は高卒後働いていたが、途中から短大に行き、栄養士の資格を取った。自分も、将来、資格のために、専門学校とか短大に行くのも考えている。
8	女	大学院へ進学して、カウンセラーも考えているが、無理だと思う。カラーコーディネーター、ブライダルプランナー、アロマセラピーの資格を取る講座を受けているので、美容系の資格を生かせる職場に行きたい。MOS検定を受けて、パソコンに強くなりたい。いろいろしたいことはあるけど、最後は普通に事務かなと思う。高校時代は保育者になりたかったが、あきらめた。子どもは好き。
9	男	高校の時には、卒業後、就職を考えていた。人と関わらないですみ、静かな職場を希望していた。しかし、高校の先生から「将来、図書館司書が君にはあっている」と勧められた。その資格を取るために、大学に行くことになった。図書館司書の資格が取れる大学を探した結果、本学となった。大学進学が決まった後、現役の幼稚園教諭である母親から、教員免許の取得を勧められた。現在、教職課程に登録している。教員採用試験対策講座も受講している。来年度から図書館司書の資格の取得課程にも登録する予定。
10	女	適当に深く考えずに本学を選んだ。今日の話を聞いて、転職ができることを知った。図書館司書の資格に興味がある。

Table 4 第2回講話を聞いた受講生のワークシートへの回答

番号	性別	問1	問2	問3	問4	問5
1***	男	欠席				
2**	男	欠席				
3*	男	1	2	2	今後始めてみようと思いました。現在教職課程に登録しているので、学校の授業にたずさわるボランティアをやってみようと思います。最近、高校の部活の先生に誘われて、母校の演奏会にボランティアとして参加する予定です。	とても助かります。大学生といえど、自分のやりたいことが見つからなかったり、迷ったりしている学生が多数だと思うので、このような話を聞ける機会は助かります。
4	男	2	1	2	人と関わるのが嫌いなので、部活とかもしたことが無かった。今でも人と関わるのは苦手。でも、キャリアカウンセラーのお話にでていたボランティア活動に参加することを検討しようと思います。	今まで好きなことばかりしてきたので、今まで興味の無かったことにも目を向けてみようと思いました。人と関わるのが苦手で避けてきたけど、めんどくさいと思わずに、挑戦してみようかと思い始めた。
5**	女	欠席				
6*	男	2	2	3	高校生の時に3.11の被災地、福島にボランティアに行っていました。今後、被災地支援のボランティア再開しようという気持ちになりました。あの場所が今どうなっているのか見てみたいです。	大学に入ってからアルバイトを始めた。接客の難しさなどを体験した。視野を広く持って、行動していこうと思いました。
7	女	1	1	4	オープンキャンパス・スタッフを始めた。大学に入ってから何かやりたかったのだけど、見つからなかった。オープンキャンパス・スタッフを知って、やりたいことが見つかった。	将来のことが何も決まっていなくて、考えるのも嫌で、不安しかありませんでした。カウンセラーさんの話を聞いて、今からいろいろなことを経験して考えていったらどうかなと思いました。1年生はやりたい気持ちがあったけど、実行できなかったの、2年生は資格に挑戦したり、実行したい。
8	女	1	2	4	オープンキャンパス・スタッフを始めた。自分が高校生の時にオープンキャンパスに参加しました。今、スタッフとして関わってみて、たくさんの思いやりがあったことを知ることができました。	転職できることを知り、一つの仕事に絞らず、いろいろな仕事ができることを知ることができました。また、いろいろなことに興味があって、やりたいことを絞りきれないということは悪いことではないと思いました。大学生で様々な体験をしていこうと思いました。
9	男	1	2	3	オープンキャンパス・スタッフを始めた。高校生の時に父親と一緒にオープンキャンパスに来た。その時に、教室を迷っていたらスタッフが教えてくれた。今度は自分が高校生を助けられるようになりたい。カウンセラーさんの話の中に偶然性という話がありました。オープンキャンパス・スタッフとして偶然出会った人と関わって、自分の将来の可能性を広げたい。	自分に今何が必要なのか、将来仕事に就くために何をすれば良いのか、しっかりと教えてもらったことで、これからどのようにしていけば良いのか道が見えたと思います。今まで、人と関わるのが苦手なことで避けてきたけど、そんなこと言てられないと思った。
10**	女	欠席				

* 第2回の講話の授業を欠席した学生である。彼らには第1回の講話を踏まえて回答させた。

** 第2回の講話は受講したが、ワークシート記入日に欠席した学生である。

*** 第2回の講話、ワークシート記入日の両方を欠席した学生である。

の効果を検証することであった。キャリア教育は学生からの様々な悩みを受け入れられるような相談窓口を強化・充実させること、学生の自主性や積極性を促すことを目的として、課外活動やボランティア活動に対する支援業務を充実させることという、辻（2007）の提案に沿って行われた。

まず、第1回の講話ではキャリアカウンセラーの自己紹介を通して、仕事やキャリアは流動的であること、未経験の仕事でも取り組むことで新たな自己発見につながることなどを伝えた。また、キャリアカウンセラー自身の経験を交えながら、コミュニケーション能力、アルバイト・ボランティア経験の必要性を伝えた。

Table 3の受講生の意見・感想を見ると、前期に聞かれた「未だ決まっていない」「分からない」「これから自分に向いている仕事を探すつもり」といった漠然とした回答は無くなったことが分かった。むしろ、受講生は講話を聞き、自分の就職を具体的に考えることができていた。たとえば、高校時代の就職活動を思い出し述べた者が4名いた（Table 3の番号2, 7, 8, 9）。彼らは高校3年生の時に自分が就職を希望していたこと、しかし様々な理由でそれをあきらめたこと、大学進学に進路変更したことなどを述べた。その上で、彼らは大学卒業後の進路について、今の自分には未熟な点があることや希望の職業などを具体的に述べていた。つまり、彼らは高校3年生の時の体験があったからこそ、大学卒業後の進路について、自分の現状を踏まえながら現実的に検討することができるようになったと言える。

受講生の中には、講話を聞き、「アルバイトだけでは厳しい」ということを認識した者もいた（Table 3の番号1, 3, 4）。厚生労働省（2016）の非正規雇用の現状と課題を見ると、非正規雇用労働者は、平成6年から平成16年までの間に増加し、現在まで緩やかに増加している。平成26年では、雇用者全体の37.4%が非正規雇用労働者である。この状況において、不本意非正規雇用労働という問題や雇用の不安定さ、正規雇用と比べた賃金の低さといった問題が生じている。また、1990年代から起こった正規雇用と非正規雇用間の賃金格差に関して、近年その差が拡大してきており、ワーキングプアといった問題も増加している（太田、2010）。こうした現実を踏まえると、

受講生が「アルバイトだけでは厳しい」という現状を認識したことは意義が大きいと言える。

受講生の6割は在学中に教員免許状や図書館司書の取得を目指す、資格を取りたいといった前向きな考えを発表した（Table 3の番号3, 5, 7, 8, 9, 10）。免許状や資格が就職活動や就労において有効であることは当然である。彼らはそれらを欲しいと漠然と考えているのではなく、国語の教師、図書館司書、カラーコーディネーターといった自分の将来に即した免許状や資格の取得を考えていた。こうした具体的な目標が生まれることで、この先の学生生活にも意欲的に臨むことができると考えられる。

以上より、受講生が第1回の講話を聞いたことによって、自分の将来の就職を漠然と考えるのではなく、自分のこととしてより具体的に考えるように成長したと言える。

次に、オープンキャンパス・スタッフの説明会と第2回の講話による受講生の変容について考察する。Table 2に示したように、第2回の講話は第1回より理論的な内容であった。計画された偶発性理論、オープンマインド、実践すべき重要な5つのキーワードなどを取り上げた。考察はTable 4の結果に沿って進める。

問1と問2の結果を見ると、キャリア教育を通じて、キャリアセンターの存在を新たに知った者が2名、キャリアカウンセラーの存在を新たに知った者が4名いた。ワークシートへの記入日に欠席した者が4名いるが、第1回の講話には参加していたのでキャリアセンターおよびキャリアカウンセラーの存在は知ったと思われる。この結果は、辻（2007）の第1の提案を満たすものであり、今回の成果の一つと言える。

問3の回答を見ると、「1：ならなかった」は皆無であった。「2：あまりならなかった」と回答したのは2名であった（Table 4の番号3, 4）。この2名の問4の記述を見ると、「最近、高校の部活の先生に誘われて、母校の演奏会にボランティアとして参加する予定です」「キャリアカウンセラーのお話にでていたボランティア活動に参加することを検討しようと思います」と回答していた。つまり、彼らはもともと「ボランティアをやってみよう」という気持ちを持っていたのである。

「3: まあまあなった」と回答した者は2名であった (Table 4 の番号 6, 9)。彼らの問4を見ると、福島の前被災地支援、オープンキャンパス・スタッフという具体的な名称をあげて、ボランティアに向かう気持ちが綴られている。この内の1名は実際に後期から、オープンキャンパス・スタッフとして活動を始めていた。

「4: なった」は2名いた (Table 4 の番号 7, 8)。彼女らも、オープンキャンパス・スタッフとして活動を始めていた。彼女らの問4を見ると、「オープンキャンパス・スタッフの存在を知ってやりたいことが見つかった」「自分が高校生の時にオープンキャンパスに参加しました。今、スタッフとして関わってみて、たくさんの思いやりがあったことを知ることができました」と述べている。こうした結果から、辻 (2007) の第2の提案もおおよそ満たすことができたと言える。

問5を見ると、「キャリアの話を聞いて助かりました (Table 4 の番号 3)」「人と関わることを苦手で避けてきたけど、挑戦してみよう (Table 4 の番号 4)」「視野を広く持って、行動していこう (Table 4 の番号 6)」「就職について不安しか無かったが、カウンセラーの話を聞いて前向きになれた (Table 4 の番号 7)」「大学生で様々な体験をしていこうと思った (Table 4 の番号 8)」「人と関わるのが苦手で避けてきたが、そんなことは言っていられないと思った (Table 4 の番号 9)」と全員がポジティブな考えや気持ちを持つことができたと言える。

これらの感想は、キャリア教育の目的は学校と社会をつなぐこと (児美川, 2015)、生きる力をつけること (鈴木, 2008) という指摘を一部満たすと考えられる。彼らの残りの大学生活において、今回のキャリア教育を通して考えたことを実行に移すことによって、生きる力が徐々に身についていくのではないかと期待できる。

今回のキャリア教育を実施した成果は次の3点であった。第一に、辻 (2007) が指摘するように大学1年生の中には就職に対して不安感を持っている者もいたことが分かった。しかし、本研究のように、キャリアカウンセラーといった専門家を交えたキャリア教育を行うことによって、不安感を軽減することが可能であることを実証すること

ができた。第二に、人と関わるのが苦手という理由で、大学に入学するまで人と関わらないように過ごしてきた者が、その状況は良くないことであり、人と関わっていこうと前向きに挑戦する姿勢が生まれたことである。就職活動はもちろん、就職後は人と関わるが増えるだけに、この心情の変化は価値が大きいと言える。第三に、オープンキャンパス・スタッフを始めるなど、行動が変わったことである。どの受講生にとっても、初めてのことを始めることは勇気が必要である。キャリア教育によって、その最初の一步を踏み出したことは、人間的成長と言える。

今回のキャリア教育を振り返ると、受講生だけでなく第一筆者にとっても大きな学びになった。第二筆者の話を聞いたことは、第一筆者の就職活動支援の知識やスキルの向上につながった。

最後に、本研究の課題として、キャリア教育を欠席した者について述べる。欠席者の中には「寝坊しました」「体調不良です」と第一筆者に連絡をした者がいる一方で、無断欠席の者もいた。無断欠席の理由が分からないので、想像の範囲内であるが、彼らはキャリア教育への関心が薄いのかかもしれない。関心が薄い者に対しては、さらに別の働きかけが必要なのかもしれない。

引用文献

- 児美川孝一郎 2015 「夢と現実の振り子」から一歩踏み出したキャリア教育を Between 10・11月号 10-13.
- 厚生労働省 2016 非正規雇用の現状と課題 正規雇用と非正規雇用労働者の推移
- 小野稔文・安藤美華代 2011 教職志望大学生の就職不安への予防介入に関する予備的研究 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 教育実践学論集, 12, 55-69.
- 太田清 2010 第10章 賃金格差—個人間, 企業規模間, 産業間格差 岩田一政 (編)「バブル／デフレ期の日本経済と経済政策」第6巻『労働市場と所得分配』慶應義塾大学出版会株式会社 pp. 319-368.
- 鈴木建生 2008 就職内定後の支援プログラムについて 進路指導, 81(5), 33-37.
- 辻多聞 2006 大学一年生の進路希望と職業観 山口大学大学教育機構 大学教育, 3, 169-177.
- 辻多聞 2007 大学が提供すべきキャリア教育とキャリア支援について 山口大学大学教育機構 大学教育, 4, 123-132.